

槐

かい

岡井省二創刊

平成24年1月号

平成二十四年一月一日発行 第二十二卷第一号 通巻第二四七号 (毎月一回一日発行)
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



初景色

高橋将夫

鶴も亀も首を伸ばしてお元日
百骸と九竅を持ちおらが春
元日や来客はみな福の神
歌がるたからからからと手をこぼる

なまはげに変身の場を子に見らる
賀状繰る時々何かつぶやきて
鏡餅やる気に根気重ねたる
喰積の空つぽになるめでたさよ
喰積の隅守りをるごまめかな
薺摘む夢の続きは次の世で
富士よりも故郷の山の初景色

槐安集

水野恒彦

曼珠沙華は創世の火のごとく
客死せし日の茫々と白芒
膨 拜 と 沖 に 日 柱 鷹 柱
能面の奥は黄落つづきけり
炭火は尉に雪降る速さ感じをり

延広禎一

風雨順時千振の花摘んでをる
狸々出づ波の鼓と菊酒と
女河童の甲羅濡れをる寝待月
鬼女の来て小町となれる良夜かな
ピカソの青炎ゆる白露の絵蠟燭



加藤みき

口中に弾んで舞うて今年米
姥ヶ餅はすでに売切れ後の月
しはしはの銀杏あまた神饌に
飴どれも近しき人のこゑになり
はやばやと池いっぱい鴨来る

石脇みはる

蘆刈の蘆火のしまつしてゐたり
朝冷えのさざ波川の深呼吸吸
寒梅や優しき言葉かけられて
初恋は野菊の道にうまれけり
基の花挿し変へみたり芭蕉の忌

中島陽華

大山の鍊金術師穴惑
香箱の手元狂うて十三夜
白帝のビルの谷間のラーメン屋
くすぐりの飛び交ふ仲や菊脰
パンとにんぎよの振り分け荷初しぐれ

栗栖恵通子

軸ぶれていびつな月の満ちにけり
初霜や銀の燭台曇りをり
満月や蓮華の舟に小籠包
伏待のたまたま通夜となりにける
針山と銀の指抜き遠銀河

竹内悦子

嫁入りの狐がとほる赤かぶら
猫を抱き木天蓼を買ふ女かな
銀杏の空が流れてをりにけり
桐一葉落ちたる一期一会かな
酔うてゐて芙蓉の花は実となりぬ

大島翠木

西国の嗚呼おみなえしおとこえし
北斗背にくるむ秋刀魚の二つの尾
燕去ぬ鍵の小鈴の音すなり
みのむしや山のかたちの闇迫る
何をもて測る余生や吾亦紅

雨村敏子

白犀の眼裏にある花野かな
重陽の菊屋の最中包みわり
枯尾花の金色の骨式三番
南中の火星夜の曼珠沙華
沈金の砂子こぼるる月夜かな

本多俊子

神々のうしろに遊ぶ秋の蝶
能面の阿形吽形に秋の風
秋の蚊の淋しからんに魂のあり
色鳥に閻魔の貌のゆるびたり
はげ紅葉空也の闇をふくらます

小形さとる

満月やルソーの森へ水汲みに
蔦紅葉ためらひの舌うごき初む
露けしや終の棲家のラビリンス
黄落や睡る腕に手を添へて
かぎりなく落ちゆく夢をほしづく夜

近藤きくえ

天 高 小 翁 鳴 の 海
祝樵二十周年全国大会
朝露を脍に今日の一步踏む
藪騒を聞きとめてをる良夜かな
白筆と硯の脇の夜の桃
ひき際の尚艶のあり穴惑

近藤喜子

又三郎の寂しさ荻の声となる
きちきちばつた少年を攫ひゆく
遠くゆく思ひを風に蘆の絮
天上の蒼く波立つ鴉の声
秋聲や形あるもの暮れしとき

谷村幸子

再会の笑顔よ秋の近江富士
山のなり長く続きて秋の湖
寄せて来て返す秋波浮御堂
樹木医の松の手入れや小鳥くる
心の襪のばして語る夜長かな

瀬川公馨

狐狸庵に露の草鮭をぬぎ捨てて
鋭角のフォルム即ち鴉のこゑ
裏甸のかほが万事や帰り花
馬追を殺生したり水こぼし
風の手が秋の夕焼けを宅配す

久保東海司

夕虹を容れて縄飛び百数う
通り雨過ぎてちちろの夜を給ふ
鳩息を合はせ音なく潜りをる
立ちつくすままに枯るるや菊人形
車椅子に頼る明け暮れ小春かな

西村純太

銀杏のみどりを炒りて供へけり
菊の日の水面に映る狸々緋
巫のひよんの笛吹く神無月
敦盛も直実もゐて荻のこゑ
月光の清めし塩を舐めにけり

中野京子

仏桑華明るい空になりました
行く雲にのりてゆきたし曼珠沙華
柿の色日々に重ねて己が色
今日も行くいざ男郎花女郎花
棉吹くやぼうぼう眉の翁面



槐市集

柴田靖子

ふりむけば秋の夕焼海に入る
弁慶草いとほしく思ふ頃となり
破れ尽き風に鳴りをり破れ蓮
落鮎の寂満面に映るへり
かれてなほ思ひ伝へし菊の花

庄司久美子

行秋のひよいひよい渡る丸太橋
社務所裏の機織る音や竜田姫
神還る鼻に粉つく日曜日
蜜柑山のフォークソングや茅渚の海
山の晴黒きみのりは古代米

杉原ツタ子

母を恋ふ歌のかずかず吾亦紅
里山に人ら集ひ来秋桜
秋遍路山のまるさに入りゆけり
子らの声萩の小枝の揺れてをり
トンネルを五つ六つ抜け初紅葉

鈴木初音

身近なる白秋の野辺日は真上
倒木に幼い生命いのち月鈴子
秋の雲近海の網にからめられ
山下る熊笹やがて秋の七草
頂相にふかぶか唱ふ信濃柿



槐集

高橋将夫選

秋深し杜の奥なるまだ見ぬ世 枚方 谷岡 尚美

枯蠮螂みどりを残す眼かな

障子閉づ不断念仏無我の声

木の実落つたれかが付いて来るやうな

十三夜くろぐろうかぶ浮御堂

蓮の実の飛んでゆきたる泥土かな 高松 十川たかし

それぞれの闇背負ひたる菊人形

手に触るる刈萱かろき家路かな

まだ若き銀杏の結ぶ実なりけり

てのひらに新蕎麦を揉む温みかな

もう追うて行かれぬ金の林檎かな 守口 柳川 晋

舞ふために生まれてきたる照葉かな

赤緑青扱き混ぜし風の色

晩秋の向かうは未来大入日

地動説を固く信じて牛蒡引く

赤緑青＝光の三原色

来し方を綴ると見えてくる芦火 岡崎 岩月優美子

騙し絵の林檎熟してをり常に

いつ迄も朽ちる事なきモネの藁塚

虚ろなる刻覚ましたる椋鳥の声

鷹渡る我が身は何処へ辿り着く

青蜜柑普陀落山に着きにけり 摂津 中田 禎子

眼力の失せて案山子の昇天す

鮭半身日に曝されて焼かれける

落し穴のおちこちにある花野かな

月光の届かぬところ魑魅のこゑ

むず痒くなりたる石榴割れにけり 守口 岩下 芳子

狛犬の口中赤し神の留守

蘆刈るや蘆倉の戸の開いてをり

ぎくしやくと地球を歩く冬の蠅

対岸の蘆火の烟流れ来し

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

秋深し杜の奥なるまだ見ぬ世 谷岡 尚美
秋も深まった杜の静寂の中にあると、杜の森のその奥にまだ見たことのない世界が見えてくるようだという。それは神々の世界か。いや、次の世かもしれない。そんな時、たまたま木の実でも降ろうものなら、そばに誰かいるのではないかと、不安がよぎる。へ木の実落つたれかが付いて来るやうな 尚美 である。晩秋のちよっぴり怖い風景。

蓮の実の飛んでゆきたる泥土かな 十川たかし
蓮に泥はつきもの。蓮の実も飛べば泥の中。誰もが知っていて、誰もが詠まなかった当たり前のこの景に作者は何かを直観したのだ。蓮の実の宿命を見たのかもしれない。他に、へ手に触る刈置かるき家路かなへまだ若き銀杏の結ぶ実なりけりへてのひらに新蕎麦を揉む温みかななどの句もあるが、いずれも素材で、好感がもてる。

赤緑青抜き混ぜし風の色 柳川 晋
青空と常緑樹の緑と美しい紅葉の中を秋風が吹いている景。赤緑青を混ぜた風とは秋風、すなはち「色無き風」。赤緑青は光の三原色で、この三色が混じると白色（無色）になる。ちなみに、絵の具等の三原色は赤、青、黄で、混ぜると黒色になる。

鷹渡る我が身は何処へ辿り着く 岩月優美子
日本には十八種類の鷹がいて、その半数が冬鳥で、秋に北方から日本に渡って来るという。一般に知られている刺羽などの鷹は夏鳥で、秋に群れをなして南方へ帰る。作者はそれらの鷹

に自らの行く末を重ねているのだろう。

落し穴のおちこちにある花野かな 中田 禎子
花野とは浄土のイメージと想っていたら、何とあちこちに落し穴があるという。世間はそう甘くないのだろう。

むず痒くなりたる石榴割れにけり 岩下 芳子
石榴はむず痒くなって割れるのだという。何事にも前兆というものがあるが、石榴はむず痒くなるのだそうだ。痛みだすのではないようだ。

小鳥来る地べたに描きし未来図に 近藤 公子
地面に何かの絵が書いてあって、そこへ小鳥が来てとまった。その絵が未来図だということから愉快。きつと素晴らしい未来が待っていることだろう。

金星が三日月の露はらひけり 熊川 暁子
金星があつて、三日月の先端から露がこぼれる幻想的な風景。鋭い感性の句。

花野へは急がなくともよきものを 竹中 一花
前書きに「悼」とあるから、追悼の一句。「花野へは急がなくとも」の措辞が胸を打つ。

雁渡る名残の空の一行詩 寺田すず江
雁が一行になって渡ってきた。そんな雁の列を見て作者は一行の詩を思い浮かべる。根っから俳句が好きなんだと思う。

すだく虫の歓喜の刹那聞きにけり 近藤 紀子
秋の夜長を鳴き通す虫の声。羽を震わせて鳴く一瞬は、なるほど歓喜の一瞬に思える。
(以下略)